

民族の誇りに生きる

—エチオピア西南部“スルマ”の人々—

岩井 信子

「失礼ですが京都大学の福井先生では？」2001年8月27日、丑三つ刻のバンコク空港であった。私は一人「関西」行きのフライト待ちをしていた。ベンチの人はおおむね眠り、人気もまばらな仄暗い通路を、キャリーバッグを引いてゆっくと歩いてきた二人連れが私の前を通り過ぎたとき、その背に向って私は思わず叫んでいた。

「そうですが」。歩みをとめて、穏やかに振り返ってくださったのはまぎれもなく福井先生、そして奥様であった。まるで背後から殴り込みでもかけそうなぶしつけな私を、お二方とも訝る風もなく受け止めて下さったのである。

私は福井先生が『季刊民族学』90号（1999年秋）にお書きになった「オモ川・ナイル川地域におけるエスノシステム」を読んで、スルマ系の人の暮らしに強く惹かれていた。私が十年来、探し求めてきた人の暮らしがそこにあった。文化の原点を生きる人々がそこにいた。それまで私はニューギニア、オーストラリア、インドネシアは小スンダ列島まで、南太平洋の島々や東南アジアの国々を探していた。だが私が求める暮らしはすでに失せ、伝統的な行事や、腰蓑やベニスケース姿は観光用になっていた。「地球最後の裸族」との「笛」に踊ってカメルーンにも行った。だが、裸族はおろか、市場に集う女性はヨーロッパファッションに身を包んでいた。

「オモ川・ナイル川地域におけるエスノシステム」に私は瞠目し、スルマ系の人々に会いたい、と思いつけていた。そこへ、2000年1月から3月にかけてNHKの人間講座で、福井先生の「東アフリカ・色と模様の世界—無文字社会の豊かな想像力—」が始まったのである。毎週水曜日のこの講座から受ける感動は私を揺るがすほどのものであった。

この前年、私はオモ川東岸をカロ、ハマルの地をはじめ最下流の集落まで辿っていた。そのとき西岸に住むスルマのことは聞いていた。「スルマは恐ろしい。争いを繰り返し、簡単に人を殺す」「スルマは野蛮だ、スルマへは行けない！」と誰もが眉を寄せ、手を横に振った。だが、「無文字社会の豊かな創造力」に、私の内に炎が立った。「行くべし！」と、一念発起。

かくしてエチオピア西南部、オモ川西岸の牛牧畜民スルマの住む地、キビシ行きが実現したのである。

バンコク空港で福井先生ご夫妻にお目にかかったのは、この第1回スルマ訪問の帰途であった。私は“運命的な出会い”を感じた。

その年、キビシへ1本の道が開通したばかりであった。日本を発つときはまだその開通を知らず、キビシ入りは険しい峠越えを覚悟していた。これまでキビシに入る研究者や写真家が越えた峠、町からキビシへ出向する役人たちがあまりの険しさに辞職を考え「給料はいらぬ峠」と呼んだという峠越えが、キビシ入りの唯一の手段であった。私たちは、開通したといってもいまだ道路予定地のような、掘削の跡も生々しいぬかるみ道のおかげで峠を越えず、何とか車でスルマの地に入ることができた。

その第1キャンプ地のツルギットで、私たちを取り巻いて群がった村人の、長老の面々が私を指して言った。「オモの東岸のハマルには白人の女が住みついておったことがある。西岸のここによそ者の女が来たのは初めてだ」。

ツルギットではズラリ並んだ男の子たち、胸に牛の顔を描いている。どの子どもどの子ども、胸から腹にかけて、体の前面いっぱい。泥をこねて一對の角

の形を作り、頭に角を「生」やしている子もいる。男の子は自分も牛になっているのである。

スルマの男の子は7～8才頃から牛囲いの中で牛と起居を共にする。牛は朝、放牧に出、夕方村の牛囲いへ帰ってくる。男の子は牛囲いの中央で焚火をして牛を迎え、夜は牛と一緒に眠る。9才ごろになると牛囲いの中で牛の世話をする。放牧に出る前、放牧から帰ったとき、いそいそと牛の腹の下にもぐって乳を搾る。少年が乳房を握ると濃厚なミルクが一直線に

走る。牛はこの小さな掌にゆったりと目を細めて巨体を預けている。そして、男の子の最も大切な仕事は牛の血抜きの手伝いである。

牛の血抜きとは、朝放牧に出る前に牛囲いで行われるスルマ流の牛の健康法。牛の病気や怪我を未然に防ぐためのスルマ伝統の方法である。肥り過ぎないように肥り気味の牛や、興奮して猛り立っている牛の血を抜く。方法は、若者が2人がかりで牛を押さえ込み、首の付け根をロープで2巻きして縛る。と首から上の血管が怒張する。浮き出た右頸静脈に矢を射る。ほとぼしる血を半切りのヒョウタンの器に受ける。およそ1.8～2リットルの血を抜く。この血はその場で、おもに放牧に出る若者が飲む。牛の血はスルマの男の大切な栄養源でもある。

この血抜きの作法は男児の生後4日目の名付けの儀式にもなっている。

スルマの男の子は牛囲いで牛と起居を共にするなかで、牛の習性や生理や健康状態はもとより、放牧地や牧草を選ぶ知識をも身につけ、やがて群を率いる力量を備えつつ育ってゆく。

放牧に出るのは主に若者。15才頃から彼らはもう放牧に出る。明けやらぬ朝の牛囲いで彼らは念入りに放牧の身支度をする。まず胸に大きく牛の顔を描く。2人で相互に胸に描きあう。角は肩から背へまわるほどに力強く逞しく。牛の顔は胸いっぱい、両の乳首を牛の目に見立て描く。「絵具」は牛の糞。まだ湯気の立つ朝の新しい糞を手に取り、この糞に焚火の灰を混ぜたドロを塗り重ねる。描く方、描い



写真1 放牧のいでたち 牛に同化 [第3次スルマ (8/14) アンジョ村]

てもらう方、このひとときは愉悦の表情である。お互いの顔もこのドロで厚く塗りつぶす。夜が白むほどにドロは乾き、くっきりと重厚な「牛」が出現する。

このペインティングは牛と一体同化の証。「オレはスルマの男だぞ」とのステータスシンボル。これが放牧の「正装」である。

牛牧畜民スルマにとって牛は単なる財産ではない。牛はスルマが族の全存在をかける、彼らのアイデンティティの最たるものであり、牛こそ彼らが命をかけて守る対象である。放牧という任務は、まさにスルマの男の“花道”である。

黒い肌が宝石のように美しい素っ裸、首、腰に、一人一人独自のビーズの細紐を巻くのみ。この正装で誇らかに牛の群を率いて若者は放牧に出る。

少年たちは、この凜凜しい若者に未来の自分を重ね、小さい胸に牛を描いて、牛に化身してみるのがある。

放牧中、もしもブメに襲われたら。ブメとはスルマの宿敵。オモ川下流に住む放牧民ダサネッチ、キビシ川下流の放牧民ニヤングトムのことであるが、とくにニヤングトムをスーダンプメと呼んで恐れ、憎悪する。

危急の際の彼らの連携の敏捷さは風の如しである。野から村へ、村から村へ、奪還に、防備に命をかけて走る。牛に生きるスルマは牛に危難が迫るとき命を惜しまない。放牧の若者たちはその最前線にいる。



写真2 ブメを殺したCの搬痕：胸、腹に各2個 [第4次スルマ バレ村]

ブメとの争いは牛や放牧地をめぐる。昨年の夏、スルマ滞り2日目の夜であった。南部のバシタ村がブメに襲われ、その村の牛五百頭ほどが盗まれた。その夜ベースキャンプのテントの中で私は夜どおしこれまで聞いたことのない音色を聴いていた。その音色は遠く近く、ときに高くときに低く、風の呻りのように聞こえ野性動物のおたけびのようでもあり、スルマ全エリアの闇の底が揺れているようなただならぬ気配を伝えてきた。朝になってそれはバシタ村へ奪還に駆けつける若者たちが村々へ呼びかける合図の呼応であったと分かった。そしてこの朝、キャンプ近隣の村から若者の姿が消えていた。

翌日夕方、スーダン境でブメと戦い牛を取りもどした若者が涼しい顔で帰ってきた。4頭の牛が弾に当たって死に、ブメが5人、スルマが3人死んだとのことであった。死んだ若者の家の前で、その果敢な働きを讃え、死を悼む銃声が一発とどろいた。

危急の際、彼らは独得の発声法を駆使する。この声は彼らの緊急時の「言語」である。それはヒュッと鋭くしじまを切り裂き、光のように一直線に宙を飛ぶ。この声で非常の事態を告げ、この声が行動の檄ともなる。そして彼らは風のように闇を走る。ハダシで、音もなく。疾風のようにひた走る。スルマの若者はその能力に魔性を秘めていると思えてならない。

スルマの思春期以降の男女は体に搬痕を入れていく。点字のようなドットで様々な文様を創り出し

ている。痛みに耐えて身に刻む美しいこの搬痕は単なるおしゃれではない。信仰の証でもない。スルマは宗教を持たない民族なのだから。搬痕はこれもスルマのステータスの主張である。文様の一つ一つはスルマの思想の表出である。例えば宿敵ブメを殺した男はアルファベットのCの字形の搬痕を入れる。2人殺したらCを2つ。3人ならばC3つ。その度に体に刻んでゆく。Cはスルマを守った証、消えることのないヒーローの印である。

キャンプで一人の少年が無邪気にCの話をはじめたとき、私は自分の目が光るのを覚えた。翌朝早

速Cの男性に会いに行った。人を殺した証を外国人にたやすく見せてはくれないだろう、否認され追い帰されるのでは、と思いつつ山を登った。だが意外にも2人の男性はまことに堂々たるものであった。牛を取り返した戦いの様子をさえ語り、そのときブメから奪った布で鉢巻きをし、腰の角笛にも戦利品の布を括りつけて、胸と右腕のCを示し「この銃でやった」とカラシニコフを構えて見せた。

後日他の村で会った男性も胸と腹に大小8個、5人分のCを彫りつけていた。両胸の大きいCはブメ2人を、腹の小さいCは1対で1人を表すから3対で3人。この男性も胸を張って照りつける西陽にCを晒してみせ、目の色変えてレンズを向け、しつこく問い質す私に快く答えてくれたのである。

少年たちはCをアレンジした搬痕を入れている。Cアレンジは、やがてわが体にCを彫りたいとの憧れのしるしである。

搬痕を入れる術者は若い女性。使用する道具は薄い双刃のレザーと5~6cm丈に切ったサウイの枝。サウイは日本でいうジャケツイバラ、ネムの木に似ている。枝の棘が猛禽類の口ばしの形をしており、この棘で皮膚を吊り上げてはレザーでさっと切る。この知恵に私はうなった。こうして切れば筋肉を切ることなく皮膚だけを切ることができ痛みも少ない。癒えるとドットになる。このドットの集合でCやほかの文様を表現する。

スルマは私にとって魅力に満ち、惹かれてやまない民族である。彼らの感性はみずみずしく、彼らは

頭がよく、その能力には驚嘆する。そして彼らは人なつっこい。

スルマは誇り高く文化の原点を生活している民族である。

彼らが牛をめぐる争いを繰り返すことについて無知蒙昧、蛮族などとさげすむのは偏見であろう。スルマの、他民族との争いは、彼ら弱小自民族の存亡がかかる、余儀なき戦いなのだ。彼らの生存を守るのは彼らのほかにはない。その極限の場において派生する行為を蛮行とさげすむなら、今日先進国、大国と自認する国が引き起こす、戦争は何なのか。



写真3 牛の血抜き【第2次スルマ デイシュ村】

過去の日本の、強制連行という名の拉致の実態、「悪魔の飽食」に暴露された、陸軍731部隊のおぞましい人体実験、イラクにおけるアメリカの悪質極まりない大殺戮は何なのか。

私は今後、スルマの一夫多妻を追求したいと思っている。複数の妻はそれぞれ独立した自分の家を持って夫を通わせ、軒を接するほどの近きに仲良く暮らす。妻どうしに嫉妬はない。恋愛感情が未熟ゆえとは考えにくい。スルマの多妻は深遠である。「原始共産社会」を垣間見るようでもある。一族が一つ火を囲み、性を共有したおおらかな古代社会をのぞくようでもある。日本の江戸、明治から昭和初期に

かけて横行した「一盗二婢三妾四妻」式のいやしい多妻とは次元を異にする。

昨年から今年初めにかけて4度目に訪れたスルマで私はスルマ名をもらった。「遠く離れた地に住むが、私はスルマの村人になりたい」との申し出が受け入れられたのである。アリブラ村の村長が村人と協議して了解を得、長老を動員し隣村の村長をも招いて名付けの儀式をしてくれた。まことにこころ篤い儀式であった。名付けは、村の一人の女性が私に彼女の名を与え、私はその女性に自分の名を与える、というものであった。私に自分の名をくれたのはナダツという人であった。そして丘の上の村の広場中央の大木の下で、全村人が見守るなか、2人は「ナダツ」「ノブコ」と新しい名をそれぞれ10回、大きく呼び合って小半日かけた名付けは終わった。

ナダツとはスルマ語で、茶色の毛をした子牛、の意味だという。私はこうしてスルマの一員としてアリブラ村に迎えられた。その日から村人は私を「ナダツ」「ナダツ」と呼んでいる。はからずもこの日は1月1日であった。

(いわい のぶこ 民俗学研究者ノ土佐の暮らしの文化を守る会)



写真4 瘡痕を入れる若い女性【第4次スルマ アリブラ村】